イカ類漁海況情報収集・提供事業

清藤　真樹

目　　的

主にスルメイカの分布・回遊、漁況等の調査結果を効率的な操業の一助として、漁業関係者に提供し漁業経営の安定、向上に資する。

材料と方法

1　漁獲動向調査

日本海主要港（小泊、下前、鰺ヶ沢、深浦）、津軽海峡主要港（大畑）、太平洋主要港（白糠、八戸）における月別漁獲量調査を行い、漁獲状況の基礎資料とする。

3　イカ釣り漁場調査

試験船・開運丸により、漁獲調査及び海洋観測を行い、日別の操業結果を配信する。

①第一次調査：平成23年5月10日から5月18日（北陸から山陰の日本海海域7地点）

②第二次調査：平成23年9月23日から10月5日（北海道西方の日本海海域10地点）

結　　果

1　漁獲動向調査

5月から1月の近海スルメイカ漁獲量は、日本海は1,403トン（前年比158%）、津軽海峡は1,346トン（同132%）、太平洋は3,739トン（同72.3%）、合計6,488トン（同91.7%）であった。また、6月から2月にかけて主に日本海で操業する船凍スルメイカの漁獲量は15,402トン（同113.1%）であった。今漁期は太平洋アカイカの回遊状況が悪く、通常1月から2月に太平洋でアカイカ漁を行うほぼ全船が日本海でスルメイカ操業を行った。6月から12月までの日本海船凍スルメイカの漁獲量は13,001トン（同109.2%）であった。

2　イカ釣り漁場調査

下記調査結果は、操業毎に無線局を通じて提供するとともに、ウオダスにより沿岸各漁協に提供した。

①第一次調査（図1、2）

スルメイカ北上群の状況を把握するために佐渡島から山陰沖合で計7回の操業試験調査を行った。

濃密な群れは確認できなかったが、対馬沖では外套長モードが22ｃｍ台、隠岐沖では17ｃｍ台、石川沖で14ｃｍ台、佐渡沖では10ｃｍ台と北上するほど小型個体が出現した。

②第二次調査結果（図3、4）

秋期に本県中型いか釣り漁船の主な操業海域となる北海道西方沖の状況を把握するための調査を行った。JADEの平成23年9月30日の50m水温図によると北海道沿岸に暖水塊があり、水温15℃付近の寒流との境目で漁獲が好調であった。逆に蝟集しやすいとされる武蔵堆周辺は暖水塊の中であった

ため漁獲が伸びなかった。

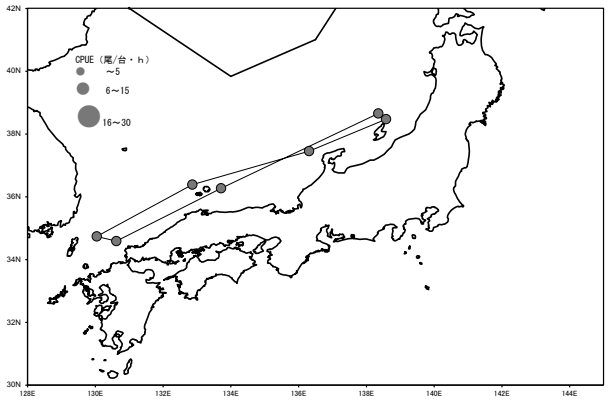

図1　5月操業結果（スルメイカ）

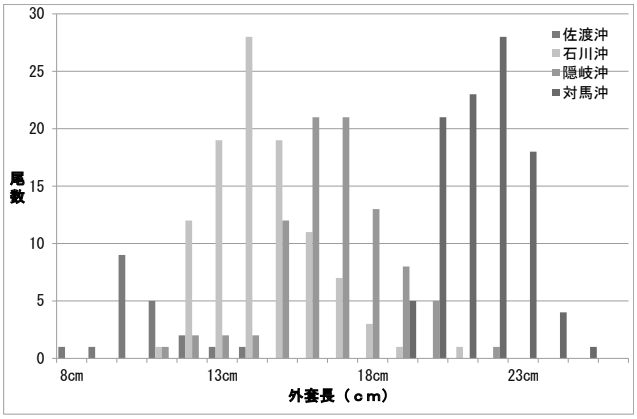

図2　海域別外套長組成

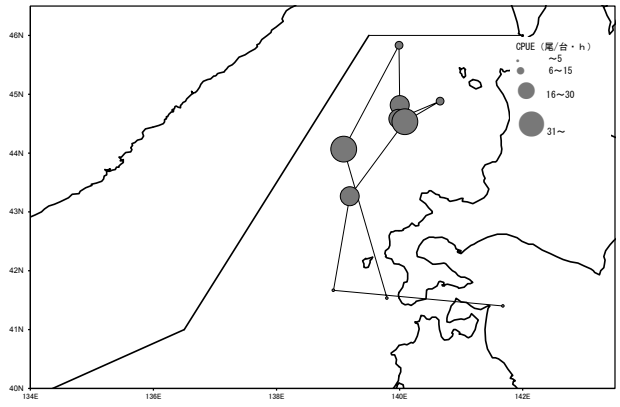

図3　9月操業結果（スルメイカ）

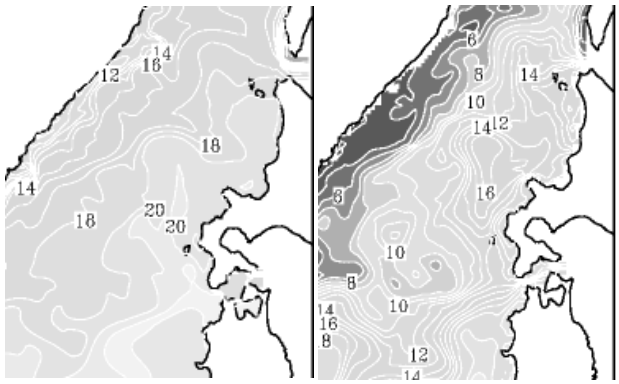

図4　0m（左）及び50m水温図（JADE）

考　　察

1　本県周辺で漁獲されるスルメイカについて

北上するほど小型個体が出現した要因について、秋生まれ群は対馬暖流の北上開始まで数ヶ月あるため、その間、成長により遊泳力を獲得し好適な水温帯に留まることが可能となるが、冬生まれ群は遊泳力が弱い段階で対馬暖流の北上が沿岸域に開始され、これに乗って秋生まれ群よりも早く北上するものと考えられる。その後、先に沿岸を北上した冬生まれ群は本県周辺で漁場を形成する一方、秋生まれ群は対馬暖流の勢力拡大とともに日本海全体に拡散し、主に沖合域の漁場を形成するものと考えられる。

2　日本海海域におけるスルメイカの漁場形成について

太平洋側の漁場は水深200m以浅の大陸棚域に蝟集する傾向がみられるが、今回の北海道西方の日本海海域における調査では、武蔵堆など水深200m以浅海域では漁獲が伸びず、その西方（沖合域）にある暖流と寒流の潮目付近に漁場が形成されていた。このことは、同海域における漁場形成は太平洋側で見られる大陸棚への蝟集効果よりも水温による影響が強いものと考えられた。